

名張市 ぬだのり

●編集発行●
 名張市総務部総務室市史編さん担当
 〒518-0486 名張市百合が丘西6番町36番地
 ☎0595-64-2249

NABARI HISTORY LETTER
 No. 13
 平成28年3月27日

藤堂藩と桜

—江戸藩邸下屋敷の不思議なご縁—

名張市と東京都豊島区とは、江戸川乱歩の生誕地と終焉地としてご縁があり、一昨年には友好の証として、豊島区からソメイヨシノの桜が贈られ、名張市役所前に植樹されています。冬の寒さも緩みはじめ、昨今のニュースなどでは、桜の開花予測が告げられております。

さて、みなさんは歴史の授業で江戸時代に各大名が江戸と領地を交互に行き来する参勤交代の制度を習ったと思います。藤堂藩も三十二万石の大大名として、支藩である久居藩も含めて江戸に6つの屋敷を構えていました。

まず藩主とその家族が住まいとする上屋敷が神田向柳原町にありまして、近くには神田川が流れ、今もかつて屋敷あった場所が歴代藤堂家藩主の官職であった和泉守から千代田区神田和泉町として町名になっています。またその向かいには支藩である久

居藩の上屋敷もありました。すこし北の秋葉原方面へ行った下谷窪町には、隠居や跡継ぎが住まいとする中屋敷がありました。そして隅田川の対岸、両国橋の東袂に江戸蔵屋敷がありまして、今の両国国技館の南側に位置し、近くには、斜め前の回向院を挟んで、その裏手には忠臣蔵でおなじみの本所松坂町吉良上野介邸がありました。その吉良邸から東に通りを3本隔てたところに久居藩の下屋敷がありました。少し余談になりますが、吉良邸は「赤穂浪士の討ち入り」で有名ですが、この赤穂事件の浅野内匠頭長矩の祖母は、何と名張藤堂家初代藤堂高吉の姪にあたる人物なのです。

そして、少し郊外に出た豊島区本郷駒込に別邸として下屋敷がありました。このあたり一帯は江戸時代、染井村と呼ばれ、下屋敷の前の通りには植木屋

が集まっており、ここで品種改良され栽培されていたのがソメイヨシノです。現在、豊島区の区の花として認定されています。ソメイヨシノは、交配により人工的に作られた品種であり、ソメイヨシノ同士では結実(種子)ができないため、今我々が目にするソメイヨシノは、接ぎ木によるもので、全て同じ遺伝子を持ったクローンなのです。

そして、それぞれの屋敷には、藩の下級武士である無足人が警護についていたのですが、特に下屋敷の警護についていた無足人を地名からとって染井無足人と呼んでいました。地元を離れ花のお江戸に赴けるとあって、多くの若者に人気の職務であったようです。

藤堂藩の江戸屋敷は、全て取り壊されてしまいましたが、唯一、下屋敷の裏門だけが江戸時代から著名な植木屋の丹羽家に引き取られ、現在



江戸時代の染井村周辺図



藤堂藩江戸下屋敷裏門(東京都豊島区)

が豊島区に寄贈され、区内の「門と蔵のある広場」に移築され、ソメイヨシノも植えられた小さな公園として今でも見ることが出来ます。

また、そんなご縁から同じく藤堂藩の大阪北区天満にある大阪屋敷にも多くの桜が植えられていました。明治の廃藩置県により藤堂藩大阪屋敷は明治政府の造幣局として建て替えられました。その際、邸内に植栽されていた桜樹木約二二〇品種、約四〇〇本も一緒に引き継がれたのです。大阪造幣局の通り抜けで見ている桜には、このようないわれがあったのです。また門外不出とされた造幣局の桜もご縁があつて特別に挿し木をした桜を淀川の水源の一つである比奈知ダムのせせらぎ公園に植えられ「通りぬけの桜」として我々の目を楽しませています。

今年のお花見には、少し藤堂藩の武士や藩邸の警護として名張から赴いた無足人の若者たちも見たであろう桜と同じソメイヨシノが今も息づいていることに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



豊島区から贈られたソメイヨシノの植樹

第1巻「名張市史 資料編 考古」
 第2巻「名張市史 資料編 古代」
 書籍版…5,000円、CD-ROM版…1,500円
 「おきつもの名張今と昔」800円

好評、販売中です。

販売場所
 総務室市史編さん担当事務所
 または、市役所2階総務室